



日本記者クラブ

## 自民党総裁候補討論会

西村 康 稔 候補

河野 太 郎 候補

谷 垣 禎 一 候補

2009年9月19日

**司会・川戸恵子委員（TBS）** ただいまから日本記者クラブ主催の自民党総裁候補討論会を始めます。私は進行役を務めます当クラブ企画委員の川戸恵子でございます。よろしくお願いいたします。

それでは、まず候補者の方々をご紹介します。皆さんからごらんになって、左から西村康稔さん、河野太郎さん、そして谷垣禎一さんです。

きょうの討論会は、第1部と第2部の2部構成で行います。第1部は、候補者による主張と討論です。第2部では、会場の皆さんから寄せられました質問に基づきまして、3人の企画委員が候補を指名いたしまして代表質問をいたします。

それでは、影山日出夫企画委員の司会で、第1部を始めていただきます。影山さん、よろしくお願いいたします。

## 第 一 部

### 《 主 張 と 討 論 》

**影山日出夫委員（NHK）** 第1部は3つのパートに分けて行います。最初は基本的な主張、続いて候補者同士のディベート、最後にまとめの発言という順番で進めたいと思います。

まず、基本的な主張を、お一人3分ずつで、この総裁選挙で何を訴えていくのか、党の再生をどう進めるお考えなのか、そういう基本的な考えを述べていただきたいと思います。

時間になりますと、皆さんの前にあるそのランプが点滅をいたしますので、そこでうまく発言を締めくくってください。

それでは、届け出順に、まず西村さんからお願いいたします。

**西村候補** 私からは、3点まず申しあげたいと思います。1つ目が党の立て直し、派閥を解消し、世代交代を進める。これが1点目であります。

今回の歴史的な、屈辱的な衆議院選挙での大敗

北、いろいろ原因はあると思います。私が地元で感じたことは、本当に地方は疲弊をして苦しんでいる、このことに私たちが、自民党がしっかりと政策を打ててこなかった。地方の思いを受けとめて、的確な政策を打てなかった。官僚が出してくる政策に乗っかって、それをそのまま、現場を知らない官僚の政策に乗っかってきた。これが一番の原因だと思います。

一方で、そうした中で自民党はどうしていたか。派閥があり、密室で物事を決めているんじゃないか。政権をたらい回ししているんじゃないか。自分たちだけがいい思いをして、政権、権力にしがみついているんじゃないか。官僚の天下りや横暴を許して、官僚とつるんで、自分たちだけがいい思いをしているんじゃないか。この国民の怒りが今回の選挙で爆発したのだ、というふうに思います。

そうしたことを踏まえて、まずは派閥を解消し、派閥の均衡だとか、派閥の順送り人事だとか、あるいは密室で物事を決める、これをすべてなくします。そして、世代交代を進めて、中堅若手が中心となって党運営し、政策を立案し、実行していく。このことを、私が総裁になれば実現をしたい。

私はすでに派閥を出ました。派閥に属しない1人の人間として適材適所にいい人材を配置し、国会論戦を中堅若手を中心にして、これからやってもらう、それが1点目になります。

2点目、良識ある保守を結集して、新しい保守主義、これで地方の再生をしたい。自由競争や市場原理、これは新しい産業を生み出すには必要です。東京を世界の最先端の金融都市とする。あるいはIT分野、もっともっといろんなサービスや商品を生み出して私たちの生活を便利にする。グローバル化の中での国際競争です。どんどんこうした分野は自由化をし、規制緩和をすればいいと思います。国際競争力を維持するため、強化するためにも、雇用をふやし、賃金を上げるためにも、私は大胆な法人税減税も必要だと思います。

しかし地方は、この競争原理だけではないんです。市場主義だけではないんです。まず私たちが基盤としている地方の共同体、これは家族の信頼関係とか、それぞれのつながりとか、こうしたものを大事にしているわけでありまして。この地域の共同体を大事にしながら地方を再生する。このこ

とが2つ目。

3点目は、選挙に勝てる体制をつくる。これは後ほどお話をさせていただければと思います。

**影山委員** では、河野さん、お願いします。

**河野候補** 私は、自由民主党とは何を指す政党なのか、ということをはっきりさせていかなければならないと思っております。ここしばらく、「自由民主党って何なの？」と問われると、「政権与党です」としか答えることができない状況がしばらく続いておりました。野党になってしまったいま、「与党です」というわけにはいかなくなりましたので、我が党そのものを再定義する格好の機会だと思っております。

本来は総裁選挙の前に、まずそれだけをやったうえで、その旗のもとに集まった人間がリーダーを選ぶべきだったと思います。が、残念ながらそうはならなかったわけであります。

私は、小さい、効率的な、無駄のない政府をつくることによって、そしてその政府が健全で公平な競争環境をつくり出すことによって経済を発展させる。そして、発展をした経済の果実がきちんと社会保障として手当てされる。そうした世の中を目指す。それが自由民主党が目指していくものだということをはっきりさせたい、というふうに思っております。

残念ながらこれだけ少子高齢化が進んで、人口のピラミッドが逆になってしまいました。きちんとしたピラミッド型の、あるいはつり鐘型の人口構成なら、社会保障の予算もその中である程度回っていったはずですが、いまの日本の逆ピラミッドに近い人口構成では、それなりの財源を社会保障に出さなければ、社会保障が回っていきません。

ですから、小さい政府と、やや大きな社会保障ということにならざるを得ないと思います。それでも大きな政府、再分配を指向する鳩山民主党とは明確に対峙できる。小さな政府で経済成長を目指すしていく。そういう旗をしっかりと立てていく必要があると思っております。

そして、そういう2つの政党がきちんと成り立つことによって、健全な政権交代可能な2大政党

制というものをつくりあげることができるようになるわけであります。

ですから、自由民主党を再生するというのは、私は何も自民党のためにやるつもりはさらさらありません。自由民主党が生まれ変わって、2大政党の一つとして、この政治システムの中に定着することが、日本の国のためになる。だから私は、ここで総裁になって、この国を前へ進めていく。2大政党制を定着させる。そのために自由民主党を生まれ変わらせてまいりたいと思っております。

**影山委員** それでは、谷垣さん、お願いします。

**谷垣候補** 結党以来の大敗北を受けての総裁選であります。したがって、まず、なぜこれだけの敗北をこうむったのかということに、これは真摯に思いをいたさなければならないのは、当然のことだろうと思えます。

いろんなことがございますが、ごく簡単に申し上げますと、やはりこれだけ景気も悪い、多くの方々が、企業経営者も、あるいは勤めておられる方も、お店を経営しておられる方も、将来どうだろうかと不安に思っておられる。それに対して政治が真剣にこたえるならいいんだけど、総裁は1年ごとにかわるではないか。そして、党内では、対立の図式などがあって、本当に国民の苦しみに目を向けているのか。こういう国民の不満が爆発して、今回の敗北になった。この点は、私ども深く思いをいたさなければならないと思えます。

しかしその反面、小選挙区で自民党、民主党候補に投じられた票は、合計で6,000万票あるわけですが、うち自民党候補に対して2,700万票得票をいただいているわけがございます。したがって、この議席にあらわれているよりは、国民の皆様は自民党に期待を寄せていただいている。これは大変ありがたいことだなあと思っております。

そうしますと、先ほど河野さんもおっしゃったことですが、自民党が一体国民のために何をやる政党なのだということを、私たちははっきり意識して、それを真剣に皆様に訴えていくということ

から始めなければならないと思います。

自由民主党は、この平和な国をつくり、そして、繁栄した国をつくることを、人権抑圧や何かの手法を用いなくて、自由な体制のもとでやってきた。そういう戦後を主導してきた政党でございます。そして、そういう中で、多くの国民が家族あるいは地域社会の絆というものを大事にしている。そういうことを尊重しながら進んできた政党でございます。

この自民党の持っている面が、全部いま生かされるかどうか、生かし得るかどうか、これはまた厳しく検討しなければなりません。が、そういった自民党の伝統の中に必ず国民の皆様のために、自民党が果たすべき使命が隠されている、と私は思っております。

したがって、いま、絆ということを申しあげましたけれども、みんなでやろうぜという精神をもってやれば、必ず自民党の再生はできる。このようにかたく信じております。そのためには党の改革も大胆に、思い切って進めなければなりません。

いままで自民党は自分たちが政権与党であるということを前提として、政策の運営あるいは人事その他をやってきました。けれども、これからはそういうものから決別して組織をつくり、政策をつくり、人事をしていかなければなりません。政策でもって国会で野党として対峙していく、ということで、私どもは党を立て直してまいりたいと思います。

**影山委員** 続きまして、候補者同士のディベートに移ります。やり方を簡単にご説明します。皆さんに 10 分ずつ持ち時間を差しあげますので、相手を指名して、持ち時間の範囲内で質問をしたり、意見をぶつけたりして、論戦を進めてください。

テーマはご自由ですし、途中で相手を変えていただいても結構です。ただし、お答えになるほうの時間も指名した方の持ち時間にカウントされますので、指名された側の方は、簡潔にお答えいただいて、テンポよく議論が進むようお願いしたいと思います。

やはり目の前のランプが点滅したら、そこで時

間ですので、うまく話をまとめてくださるようお願いいたします。

それでは、今回は 1 つずらしまして、まず河野さんからお願いいたします。10 分間です。

**河野候補** それではまず、西村さん。中堅若手の候補者が 2 人いますので、当然決選投票になったら、2 位 3 位連合、あるいは過半数に行かなければ、1 位 3 位連合ということになると思います。どちらか上のほうにいくところへ集中をさせる、そういうことでよろしいでしょうか。

**西村候補** まあ、私の得票がいくらになるか全く考えておりませんので、想像はできません。が、私と河野さんでは政策が違い、手法の違いが大分ありますので、これを私たちを応援してくれている人たちが理解ができるかどうか。ここにかかってくると思いますので、いまの段階では即答はできません。

しかし、世代交代を進めたい思いは一緒ですから、何らかの共通点を見つける努力はできるのかもしれないですね。

**河野候補** 2 位 3 位連合、イエスですか、ノーですか。

**西村候補** イエス・アンド・ノーですね。

**河野候補** ということは、別に若手から代表が出なくても、谷垣さんに結果としてなってしまうても、西村さんは構わないと思っていらっしゃるわけですね。

**西村候補** そうは思っておりません。

**河野候補** じゃあ、2 位 3 位連合しかないんじゃないですか。

**西村候補** 私がその 2 位 3 位連合で代表になれば、それは受けます。

**河野候補** えっ、2位になったら受けるけど、3位になったら受けないということですか。

**西村候補** まだ2位になるか3位になるか、その結果がどうなるかわかりませんから、私は、いまの段階ではそれはお答えできません。

**河野候補** 世代交代をしようと思ったら、2人で手を組まなければ世代交代にならないんじゃないですか。

**西村候補** それはそうだと思います。ただ、相当な違いが——私は後からまた質問させていただきますけれども——ありますので、それがうまく収れんできるかどうかのところは議論をさせていただきたいと思います。

**河野候補** 両院議員総会で、私は推薦人を10人に下げるべきだという動議を出しました。その動議に賛成をされましたでしょうか、反対をされましたでしょうか。また、その理由は何だったのか。お二人にそれぞれ簡潔におうかがいをしたいと思います。まず谷垣さんから。

**谷垣候補** 私は賛成はいたしませんでした。まあ20名というのはなかなか高いハードルである、私も前回のとき思いました。しかし、最終的にはやはり20名集められなければ、なかなか当選も果たせないということだろうと思いますから、まあ、一応の合理性はあるかな、というふうに私は思っております。

**河野候補** 西村さん。

**西村候補** 私も賛成はしませんでした。20人ぐらいの考え方や手法について理解がある人が周りにいるということは、私は最低条件だと思います。ただ一つだけ、こういう討論会は、本当は出たい人が推薦人を集める前にやれば、それを聞いて、「推薦人になろう」という人が出てこられるかもしれませんから、ちょっとやり方を変える、そんな工夫があってもいいのかなあ、ということ

は思いました。

**河野候補** 私は、両院議員総会で10人と申しあげたのは失敗だったと、いま、思っております。あのときにやっぱり推薦人制度を撤廃すべきだといわなかったのは、私の間違いだなあと思っております。

推薦人を20人集める能力と、国をどうにかする、あるいは自由民主党を再生する能力には全く何の関係もないというのが、自分で20人の方々にお願いをしてみて、あるいは石破さん、小野寺さんが今回出られなかったのをみて、はっきりしたと思っております。

20人の推薦人を集めているときに、町村さんがご自分で私の推薦人に電話をしてこられて、「河野太郎の推薦人にはなるな」というようなことをやられました。そういう派閥の親分を、西村さんはどう思いますか。

**西村候補** 済みません、私はその事実を知りません。

**河野候補** そういうことがありました。どう思いますか。

**西村候補** それはどういう理由でされたかわかりませんが、まあ、ひょっとすれば、私のことをおもんばかって、親心的な感じでやってくれたのかもしれない。が、それは全くわかりません。想像の域を超えません。

**河野候補** 谷垣さん、来年の参議院選挙に向けて、当選しそうな候補者は、差しかえをすべきだと思われませんか。

**谷垣候補** やはり勝つことが第一ですのでね、差しかえということは検討しなければならないと思います。だけど、これは相当議論しなきゃだめですね。

**河野候補** どういう議論をすべきでしょうか。

**谷垣候補** まずやっぱり、どの時点でどういう世論調査をかけるかとか、そういう客観的なデータも必要でしょう。それから、何ていうんですかね、やはりある程度選挙というものは、合意といいましかね、大勢の方が協力してくださらなければできませんので、そのあたりも十分考える必要があると思います。

**河野候補** 西村さん、同じ質問です。

**西村候補** 私は勝てる候補にかえるべきだと思います。はい。

**河野候補** 西村さんは、外務省の政務官をやられておりましたが、私も外務委員長として大変お世話になりました。外務委員会の最後のほうで、日米の核密約が外務委員会の大きな争点になりました。私は村田さんに直接お話をうかがって、あるいはお名前は申しあげられませんが、複数の方からうかがって、この核密約はあると思っています。それを日本政府は表に出すべきだ、と思いました。

ところが外務大臣は、「調査する必要もない」という一言で終わってしまいました。政務官として外務省の中でどういう動きをされたか、教えてください。

**西村候補** 報道あるいは河野委員長の動き、活動が報告されたのを受けて、省内何人かの人に、事実があるのかないのかを確認いたしました。しかし、彼らは「ない」ということをいいました。で、私は、大臣が調査はしない、そういう方針を述べられましたので、最終的には私の上司である大臣の判断に従いました。

**河野候補** 最終的に大臣の方針に従うのは、政務官として当然だと思います。が、外務省のお役人が「密約はない」といわれたときに、それで納得をしたんでしょうか。あるいは大臣に、調査すべきだということを意見具申されたんでしょうか。

**西村候補** 私は、いろんな資料をみせてもらいま

した。それから、調査をしてくれと、本当かどうか確認をしてくれと、何度かやりとりをしました。これは外務省の官僚たちとやりました。しかし、最終的に「それはない」ということをいつてきました。大臣とは直接話をしておりませんが、秘書官を通じて話をしました。

**河野候補** 谷垣さん、この核密約の問題についてどう思っているか、お聞かせください。

**谷垣候補** いままでこの問題についていろいろ外務省の話を聞いたりして、まあ、「ない」という説明を聞いてきたわけです。それで、一応いままでもそれを信じてきていることは事実なんです。問題は、仮にある、ない、いま議論がありますね。ですから、これからそれをどうさばいていくかということのほうが重要なんじゃないかなと思っています。

**河野候補** 私は、核の密約はあったと思っています。ただ、何が大事かという、それを隠していたかどうかというよりも、北朝鮮がミサイルに核を搭載したときに、日本としてどういう抑止をするのか、それを考えるときに、この密約は決定的な邪魔になると思っています。これを表に出して、そしてきちんと抑止の議論ができるようにすべきだ、と私は思っています。

財務大臣を務められた谷垣さんにもう一つ、具体的なことをおうかがいたいわけですが、メディア芸術総合センター、俗称国立漫画喫茶という予算が補正予算の中に入りました。私は無駄遣い撲滅プロジェクトの中で、補正予算の提出前に、この説明を文科省から聞いて、これは全く意味がないと思いました。つまり117億円で建物は建つけども、中に入れるものを買うお金すらその中には含まれていない。こういうものは無駄だから補正予算から削るべきだということを申しあげました。が、与謝野さんはこれを中に入れられました。もしあのとき谷垣さんが財務大臣だったら、この国立漫画喫茶に予算をおつけになったでしょうか。

**谷垣候補** あのときの補正予算は、十分準備があったのかどうかかわからないけれども、とにかく景気対策としてできるものはできるだけ詰め込もうということがありましたのでね、あるいは中身がよく詰まっていなかったのかもしれない。

ただ私は、京都にも、漫画ミュージアムとありましたかね、あります。けれども、大変これは京都の活性化にも役立っております。ソフト産業や、そういうサブカルチャーみたいなものをどうバックアップしていくか。サブカルチャーってあんまり政治が出てはいけないのかもしれませんが、そういう視点は必要だと思っております。

**河野候補** 無駄遣い撲滅プロジェクトを1年半やってみて、予算の名目は大変すばらしいけども、事実そのとおりにお金を使っても何の効果もあげないという予算がたくさんあるというのを目の当たりにしてまいりました。

117億円を使って箱物をつくれば、何かサブカルチャーが発展をするかのごとくの説明がありましたけれども、決してそうはならなかったと思います。あの15兆円の補正予算は確かに景気対策には必要だったのかもしれない。が、例えば2年、3年基金としてお金を役所に預ける、あるいは団体に預ける、あの種の基金については、谷垣さんはどう思っているのでしょうか。

**谷垣候補** うーん、これはもう少し工夫の余地があるのかもしれない。

**河野候補** 私もあの基金については非常にじくじたる思いであります。やはりああいうことにきちんとストップがかけられなかった、そこに問題があったと思います。私は、谷垣政調会長のもとで政調にりましたが、与党審査のあるべき姿について、最後、谷垣さんどう思われるか、お答えをいただいて終わりにしたいと思います。

**谷垣候補** 与党審査全体ですか。

**河野候補** 与党の法案、予算の審査について。

**谷垣候補** うーん。自民党は、これ、法案によってきちっと審査したもの、必ずしもきちっと審査できなかったもの、いろいろそれは過去あったと思います。私はいままで党の審査の中で、むしろ個々の審査よりも、一番の問題は全体を調整する、そういう機能が党にどれだけあるかということをやや疑問に思っていました。政審というのが本来そういう役割を果たすべきなのに、個別の法案の審査に終わっているという点、これは改めていく必要があるな、というふうに感じております。

**影山委員** 時間が来ました。では、続いて、谷垣さん、10分の持ち時間をお願いいたします。

**谷垣候補** 河野さんのお話の中で、自民党が国民のために何をしていく政党であるのか再定義云々という話がありました。保守政党であることをはっきりさせようという中で、「小さい政府」ということをいっておられるわけです。それで、小さい政府で、社会保障はしっかり、やや大き目という表現をさっきされましたでしょうか。しかし、小さい政府というイメージは、国際的にみますと、例えばアメリカのように、租税負担率が4割いっていないでしょうか、30数%ぐらいの国を「小さな政府」というふうにイメージをしていると思います。日本の場合、これだけの少子高齢化ということを考えますと、その程度の租税負担率では多分維持できないと思うんですね。

自民党の中には伝統的に積極財政論者もあり、あるいは緊縮財政論者もいる。いろいろな議論があったのが現実でございますから、自民党の中には、小さい政府を志向する方もあれば、必ずしもそこまで小さくしないで、財政をいろいろ使おうという方もあって、そのときそのときで議論を交代しながらやってきたということがあると思います。

しかし、いま、社会保障の現状を考えますとね、小さな政府というのはいささか無理があるのではなからうか。河野さんはそこをどう考えておられるのかですね。それをすぐ自民党のアイデンティティーと結びつけて議論されると、いろんな方がいらっしゃる中で、必ずしもいいのかどうかと

いうことを、どうお考えでしょうか。

**河野候補** ここしばらく自由民主党の抱えていた問題は、その軸が非常にぶれていたことにあるんだと思うんです。私は、小泉改革というのは、原則的に方向としては正しかったと思います。しかし、やり切れなかったために、社会保障の予算を削減したり、あるいは規制緩和を事業者規模の小さいところから始めたりという、いくつかの反省点はあると思います。が、方向性として官から民へ、中央から地方へという動きは正しかったと思います。

国民負担率をどこにするかというのは、私は、それぞれの国の人口構成と密接にかかわっていますから、アメリカのように移民を広く受け入れて、人口構成がピラミッド型になっている国と、逆ピラミッドになっている日本と、同じ小さな政府でも、同じ負担率というわけにはいかないというのは、そのとおりでと思っています。が、今度の民主党の政権のように、一度国が税金で吸い上げて、それを手当で再配分をするんだ、ということに対しては、基本的に自由民主党は少し違うんじゃないか。むしろ経済を積極的に伸ばしていくことによって、雇用を生み出し、一人一人の豊かさをつくっていく。それが自由民主党の基本的なあるべき姿だということをはっきりさせるべきです。

しかし、こういう時代ですから、米国の民主党と共和党だって、だんだん、だんだん真ん中に集まる。英国の労働党、保守党だって真ん中に政策が集まってくるわけですから、明確にそこがずれるということはないかもしれませんが、お互いの立ち位置はこういうところにあるんだということを確認したうえで議論をする必要はあると思います。

それから、積極論と緊縮論が、いままで自由民主党の中にあったというのは、相手が社会党しかなかったからそういうことができたわけです。今度は民主党という大きな政府、再分配指向の政党があるわけですから、自由民主党としてはきちんと保守のよって立つところへ戻るべきだと、私は思っています。

**谷垣候補** いま人口構成によって違うということをいわれました。そうしますと、あれですね、河野さんのイメージしておられるのは、小さな政府といっても、租税負担率が4割に満たないとかいうようなイメージではなくて、現実の日本ではもう少し大きな租税負担率というようなことを考えておられるのでしょうか。

**河野候補** そうならざるを得ないと思っております。例えば、私は基礎年金は全額税方式をずうっと前から主張しておりますが、それだけでも消費税率は9%必要になってまいります。ですから、アメリカと同じ負担率ということにはならないと思います。それは政府のあり方というよりは、人口構成と比べて、社会保障に必要なお金がそれだけ出ていくのがあらかじめわかっていますから、その分で負担率は日本とアメリカは違ってこざるを得ない。

**谷垣候補** そうしますと、普通の用語でいえば、「小さな政府」を主張されるよりも、例えば麻生内閣のときは、「中福祉中負担」というような表現を麻生さんはされておられましたね。市場原理主義というようなものから決別して、もう少しセーフティネットに力を入れていこうという主張をされておられたわけですね。

私はその方向は間違っていないと思うんです。基本的に、河野さんのお考えもそれと近いというふうに考えてよろしいのでしょうか。

**河野候補** そう遠くはないかもしれません。私は社会保障と、それ以外の政府の機能は一度分けて議論をする必要があると思っております。社会保障については、人口構成を考えて、必要な分の財源はきちっと手当てをしなければなりません。例えば、中央政府がその機能のうち、移せるものはきちんと地方へ財源をつけて移していく。地方へ財源と権限を移すことによって、中央政府そのものを小さくしていくということは、やっていかなければならないことだと思います。政府そのものは小さく、しかし社会保障は、必要なところはきちんとやる。そこは分けて議論をすべきです。

これを一緒にして、「中負担中福祉」というのは、誤解を生むことになりかねないということを、私は恐れております。

**谷垣候補** そこで、いまのお話ですとね、もう一つ社会保障に関しては、ある程度大きいといっていいかどうかわかりませんが、人口の現状に合わせていかざるを得ないというお考えですね。これは行く行くは、租税の負担というのもどこかで求めなきゃいかんと、こういうふうに理解してよろしいですか。私はそう思っているわけですが。

**河野候補** どこかでというよりは、年金についてはなるべく早く税方式を導入して、早くやるべきだと思っております。これは、去年、岡田さんを初めとする民主党のチームと、野田毅さんを代表として、私、亀井善太郎さんの3人のチームで半年議論をしました。民主党、自民党の合意案というのをつくりましたので、やる気になれば4年を待たずとも、これは与野党の合意ですすぐできるのではないかと、思っております。

**谷垣候補** いま、社会保障のことをいわれましたが、地方の疲弊というようなこともいわれるわけですね。で、私はその背後にやはり小さい政府でやりますと、金は民間に流れていく。本当に必要な資金はより効率的に必要なところに流れていくはずだと、多分大きな意味ではそういう考え方があるんだと思います。

ところが、現実には起こったことは、小さな政府にしていくと、日本は相当成熟していますから、なかなか投資したものにはうんと返ってくるといような場所をつくりにくくて、海外に流れていったということがあったんじゃないかと思えます。やはり地方にもう少し金が流れていく仕組みをつくる必要があるのではないかと私は思っております。その点はいかがでしょうか。

**河野候補** 日本の資金が海外の投資先に流れていくということはもちろんあったと思います。が、逆にいうと、海外の資金が日本の投資先に流れてくるということについて、我々は少し鈍感だった

のかなあと思っております。

官が官のためにつくったいろんな規制のおかげで、海外の資金が日本に入ってきたというところが、これまでであったのではないかと。地方につくられた、例えば空港にしる、港湾にしる、そういったものに本来なら海外が投資をしようというときに、海外がそれを保有することを禁ずるというような国土交通省の議論がありました。そういうことを我々は政権与党として配慮してこなかったわけです。本来、そこをきちんと規制緩和をしていけば、海外の資金が入ってきたんだと思うんです。

小泉政権のときに、規制緩和をやったところが、事業者規模の小さい、例えばタクシー会社とかガソリンスタンドということになってしまった。そうではなくて、例えば、空港とか電力といった事業者規模の大きいところの規制緩和をやれば、海外からの資金が日本の地方にもきちんと入ってきたと私は思っています。

**谷垣候補** そこは私、ちょっと疑問に思うんですね。空港とかなんとか、かなり大きなところには入ってくるかもしれませんが、日本の田舎のほうにいろいろ金の回っていく仕組みは、それだけではなかなかつくりにくかったんじゃないかと私は思います。大きな政府か小さな政府とおっしゃったけれども、それはちょっと日本の現実には合わないんじゃないかということを、実は河野さんにかがったんですが、西村さんはそこをどうお考えでしょうか。

**西村候補** 先ほど申しあげましたけれども、金融分野とかITとか、あるいは大都市部、これは日本を引っ張ってもらう。世界の国際都市、金融都市として頑張ってもらわなきゃいけませんから、これは経済的な規制を小さくして、いわば自由化、競争原理によって、もっともっと発展してもらう。そういう意味での経済的な規制は、私は小さいほうがいいと思っています。こういう分野ではですね。したがって、これは小さな政府になります。ただ、地方の共同体だとか、地方の財政、税源を移しても、企業がないところはその収入もないわけですから、一定の交付税も必要です。そうした

ことを考えると、やはり都市部とか、経済の最先端の分野と、また地方経済とは別に考えたほうが良いという気がします。

**谷垣候補** 私もその点は西村さんと全く同じ考えでございます。

**影山委員** それでは、最後に西村さん。10分間です。

**西村候補** まず最初に、私の立候補が、谷垣さんを助けるために、若手を分断するために擁立されたんじゃないかとか、そんなことがいわれておりますけれども、これはもう大変不名誉な話であります。私を推薦していただいた推薦人の方々に本当に申しわけない。本当に失礼な話だということを申しあげたいと思います。

私は、1人で基本的なお願いに回り、お電話をし、そして推薦人になっていただいております。しかも石破さんを応援しておられた与謝野さんや鳩山さん、あるいは小野寺さんを応援しておられた山本さんやほかの方々、こうした方々が最後に私の推薦人になっていただいております。あるいは若手の同期の4人のメンバーなどが立ち上がろうということで、私の推薦人になってくださっておりますので、まずこのことを申しあげたいと思います。

そのうえで、谷垣さんとの違いをぜひ出したいと思います。まず最初に、谷垣さんですね、どうやって参院選を戦うのか、このことを申しあげたいと思うんですが、谷垣さんは小泉政権のときの財務大臣をやりました。先ほどから、小泉路線、小泉構造改革、小泉・竹中路線について議論がありましたけれども、あのときに地方の予算を大きく削った、社会保障の予算2,200億削減をやった。

もちろん党内でいろんな議論がありました。しかし、最終的に谷垣さんは財務大臣としてあれを決断されてやられた。その結果、地方が大変な疲弊をしている、これはおそらく、いま感じておられるんじゃないかと思っておりますけれども、こうした中で、もし谷垣さんが総裁になられて、来年の参

院選挙を戦うときに、地方で、いや、民主党からですよ、「谷垣さんはあのときの財務大臣ですよ、責任があるんですよ、予算を減らした人ですよ」といわれたときに、どういうふうに反論をされますか。

**谷垣候補** まず、やっぱりあのとき「三位一体の改革」というのがありました。それで、地方自治団体は非常に税源移譲を求められました。で、その結果、確かに権限と税源はある程度行ったんですが、やはり財政力のあるところにはよかったけれども、財政力の少ないところには、結局、人と企業のあるところに税が集まりますから、そこが非常に厳しくなってしまった、というのが現実だったと思います。しかし、むしろそれは地方自治体が税源を移譲してくれと望まれた、ということだと思います。

もう一つの問題は、交付税がうんと減ったじゃないかという問題があります。これは、自治体と国のプライマリーバランスを比較しますと、自治体のプライマリーバランスはかなりよくなっていたけれども、国のプライマリーバランスは、状況が地方に比べて悪かったということがありましたので、そういう結果になったんだと思います。

しかし、これから考えますと、やっぱり私は、交付税みたいなものを、いま、地方が一番望んでいると思いますから、それに向けてはやはり税をきちっと考える必要があると思います。

**西村候補** わかりました。もう一度お聞きしますけど、あのときの予算をつくったことに対して、責任を感じておられますか、おられませんか。

**谷垣候補** まあ、結果はいろいろ地方が悩まれたわけですから、私はそれは責任は感じておりますが、政調会長のときにも若干の手当てはさせていただきました。

**西村候補** はい。それから、谷垣さんへの2つ目の質問です。派閥の推薦を受けられて、今回立候補しておられます。ご自身もかつては派閥の会長でおられたということでもあります。

私は、もう派閥はやめて、本当に中堅若手を中心にしながら、まあ、もちろんそれだけではできませんから、老・壮・青のいろんな経験を集めながら、最前線で戦うのは我々中堅若手でやるという思いであります。派閥の推薦とか派閥均衡とかは一切考えないつもりですが、人事をやられるに当たって、派閥の推薦、バランスを考えられますか。

**谷垣候補** 先ほど西村さんがね、私を助けるために出たんじゃないとおっしゃった。私は、それは西村さんのおっしゃるとおりだと思います。いま、派閥の推薦を受けたとおっしゃいましたけど、私は派閥に推薦をくださいなんてやったわけじゃありません。どなたもお出にならないときに、自分1人で走り出して、応援してくださる方があったら応援して欲しいということでやってきましたから、派閥の推薦を受けてやっているというふうには思っておりません。

それから、あとは人事の問題ですね。これはもうね、やはり派閥というものが党の人事を壟断するというようなことはいけませんから、これは派閥の考え方というものを排除して、適材適所、それから若い方の登用も考えなきゃいかん。こういうことだろうと思います。

**西村候補** はい、ありがとうございます。

河野さんにおうかがいをいたします。小泉・竹中路線が中途半端で終わったからだめだった、という言い方をされましたけれども、地方は、この路線、構造改革路線で、先ほど責任の一部を谷垣さん認められましたけれども、結果的に予算が減り、規制緩和が進み、非常に疲弊した。これから小泉・竹中路線を続けるべきだと思いますか。イエスかノーかでお答えください。

**河野候補** 小泉・竹中路線というので、何を意味するのかというのが大事なんだと思うんですね。例えば、地方が疲弊をしたのはなぜかという、地方に権限を移す、しかしそれに必要な財源を移すときに、中央官庁や族議員が抵抗したために…

…。

**谷垣候補** 河野さんいつもそうおっしゃるけど、族議員というのはちょっと違うんだなあ、あの場合、三位一体のときは。

**西村候補** まあまあ。

**河野候補** 私は、本来、移るべき財源が移されなかったことによって、地方に財源が足らなくなってきたんだと思っています。

それからもう一つは、その規制緩和についても、本来やるべき事業者規模の大きな、あるいは公の関与の大きい産業の規制緩和がおくれ、事業者規模の小さなところが先に規制緩和されてしまったというのは、反省点だと思います。

**西村候補** わかりました。イエスかノーかでこれもお答えいただきたいんですけども、私も公共事業、無駄なものは減らすべきだと思います。しかし、必要な防災対策であったり、環境対策であったりというのがあると思うんですが、地方の公共事業は総体的に半分ぐらいまで減っています。これはさらに減らしたほうがいいというお考えですか。イエスかノーかでお答えください。総枠です。

**河野候補** 総枠は減らしても構わないと思っています。そのかわり観光産業のような、きちっと人を雇用できるものをふやしていく。そういう条件があると思います。

**西村候補** わかりました。それから、同じく河野さんにお答えをいただきたいんですが、先ほど派閥の会長のお話がありました。私は、個人攻撃とか批判をするのはあまり好きではありませんし、したくはないんですけども、この間からそういう個人攻撃、派閥のお話も出ていましたので、少しおうかがいします。河野さん自身も、お父さんのつくられた河野派におられ、いまは総理・総裁であった麻生派におられます。派閥を出られますか、出られませんか。

**河野候補** この総裁選挙が始まるときに、私の推

薦人になってくれている何人かが「派閥を出よう」といって、いま、相談をしてもらっています。私は、20人の推薦をいただいていますから、なるべく足並みをそろえて、出るなら一緒に出たいと思っています。が、例えば森喜朗さんの「クモの巣」に絡めとられてしまっている人に対して、派閥を出ようというのは、かなり厳しい話だと思うんです。

**西村候補** わかりました、わかりました。

**河野候補** 例えば総理大臣になった人や、三役になった人や、大臣になった人は、派閥を離脱しちや戻る。離脱しちや戻る。昔は派閥解消といって、解消してみたけど、勉強会で復活をしてくる。

**西村候補** わかりました、わかりました。

**河野候補** 問題はリーダーが派閥を相手にせず、派閥に人事権を渡さず、資金を渡さず……。

**西村候補** わかりました、わかりました。

**河野候補** 公認権を渡さないのが大事なのであって、派閥を出るか出ないかというところに矮小化するの、私は間違っていると思います。

**西村候補** それでは、別の聞き方をします。これまでその派閥におられて、恩恵を受けたことがありますか、ありませんか。イエスかノーでお願いします。

**河野候補** 大変楽しい仲間と、楽しいときを過ごさせていただいておりますし、いろんな話を聞いたということは、非常に私は勉強になったと思います。

**西村候補** 副大臣を派閥の順送り人事でされたと思いますが、これは派閥のおかげだと思っていますか、思っておられませんか。

**河野候補** 自由民主党というのは、当選回数で人事をやっているわけですから、無派閥の人間も同じように順送り人事の対象になっているわけです。この順送り人事とか、適材適所でない人事そのものをやめなければいけないわけで、本来、河野太郎が町村派あるいは森派というところになれば、ずうっと希望していた外務省の副大臣をやらせてもらっていたと思うんですが、残念ながら外務省の政務官も副大臣もやらせてもらえませんでした。

**西村候補** 法務副大臣でしたですね、それは、麻生派から連絡を受けて、調整の結果そうなったということですか。

**河野候補** 違います。当時の武部幹事長に希望を聞かれて、外務がだめならば法務をお願いしますといって、幹事長から法務の副大臣をいただきました。

**西村候補** わかりました。先ほどの年金の話ですが、9%の消費税が必要だといわれました。しかし、いまの消費税は2%近くは地方に行き、さらに残り3%で福祉や医療にも使われています。たしか野田先生の本、ご主張は16%ぐらいまで上げなきゃいけないという主張ですが、最終的に消費税を何%まで上げなきゃいけないというお考えですか。

**河野候補** どこまで消費税でカバーするかというのは、議論の余地があると思います。いまの国民年金の仕組みでは、本来6万6,000円をお支払いすべきところを、平均して5万3,000円しかお支払いができていない。そして、無年金になってしまっている方には、全額税金で生活保護をお出ししている。

こうしたことを考えると、私は消費税を上げてでも、きちんと基礎年金を7万円毎月65歳以上の日本人すべてに支払う、その必要はあると思っています。そこから先どこまで医療を含めた社会保障に消費税を充てるかというのは、これは今後議論をしていかなければならないと思います。が、

年金に関しては、私は明確に全額税方式で、消費税を財源にすべきだと思っています。

**西村候補** 時間ですね。

**影山委員** もうちょっと論戦を聞いていたい気もするんですが、お約束どおり時間ですので。じゃあ、最後に、言い残したことを含めて、1人2分ずつで、締めくくりの発言をお願いいたします。では、これは谷垣さんからお願いします。

**谷垣候補** 2つ申しあげます。1つは、先ほどから派閥の議論なんかがいろいろ出てきておりますが、私はだれを排除せよ、彼を排除せよという議論をやってますとね、300何人いるときはそれでもよかったんですが、衆議院議員が100人ちょっとしかいなくなったとき、これはなかなか全員野球でやらなきゃだめだなあと、私はそう思っております。

ただ、もちろん、先ほど西村さんからのご質問がありましたように、適材適所できちっと派閥の横車などは排除していかなきゃならないことは明らかです。

それからもう一つ、やはり私どもは政策でもって野党と対峙していくということをきちっとやらなければなりません。特に、例えば子ども手当に象徴されますような、極めて大きな福祉を、財源のことを全然議論——まあ、4年間消費税凍結といっておられるんですよね、小さな財源でやる。しかもそれを支える公務員組織は小さなものでやろうというのは、これはなかなかできることではない。そういう問題点はきちっと指摘してまいりたいと思っております。

**影山委員** それでは、西村さん。

**西村候補** 全く無名の私が立候補したということが、自民党が変わる第一歩だというふうに思っております。私は裕福な家で育ったわけでもありませんし、世襲でもありません。落選の経験もあります。選挙区は離島まで抱えております。地方の共同体が崩れかけている。地方を再生する。そ

の痛みを一番わかる人間だというふうに思っています。一方で、国際経済の中で日本経済を発展させていく自信もあります。

そして、この地方の再生を通じて、来年の参議院選挙に絶対勝たなきゃいけない。そのための万全の態勢を組んでいく。政策面では、若手を中心になって国会論戦をやり、そして活力をつくり、リクルートをし、NPOや女性や、いろんな幅広い層から発掘をし、指導していく。そして、その次の統一地方選挙、そして、来るべき政権奪還のための衆議院選挙に向けて、三位一体、衆議院、参議院、統一選、衆議院選挙と向けて、一体となって取り組んでいきたいと思えます。

そして、そのときに勝つためには、落選された皆さん、涙をのんだ皆さん、仲間の皆さんがこの次に勝ってもらわなきゃいけません。4年間選挙はないかもしれない。こういう方には非常につらい思いで、いまお礼回りなりされているんだと思います。もちろん新しい候補者を選ぶ、リクルートしなきゃいけない場面もあるかもしれませんが、次回頑張るぞという仲間に、ぜひとも強烈な支援をしたい。彼らにもっともっと支援をして、そして、政権奪還のために頑張ってまいりたい。このように思います。

**影山委員** では、河野さん。

**河野候補** 先ほどの谷垣さんの質問に答えている中で、やっぱり総裁選の前に自由民主党が目指すべきものは何なんだという議論をきちっとやらなかったのは、スタートラインを間違えたなあという気が、正直しております。総裁選挙をやりながらこの議論をやるよりは、先に自由民主党が目指すものはこれなんだということをはっきりさせて、全国の組織、党員の皆さんにきちんとそれをお諮りをしたうえで、やっぱりリーダーを選ぶというプロセスにするべきだった。ちょっと自由民主党再生のスタートラインの位置を間違えたなあという気が、正直しております。が、スタートしてしまいましたから、とにかくここはしっかり勝って、自由民主党を立て直してまいりたいと思っております。

今回は、本当に自由民主党が必要なのかどうかという議論ですから、私は表面を飾った議論はすべきないと思っています。全員野球には私は反対です。全員野球といって、やっぱり自由民主党のあしき体質を引きずってきた人をもう一度ベンチに入れるべきではない、と思います。そういう人はスタンドでみていただければいいんだと思います。

そういう意味で、派閥の件についても、表面的な派閥の解消、何度も号令をかけて、結局もとに戻ったわけで、そういう表面的な議論をしてみても、いま、何の意味もない。本音でこの党を国民の皆様が必要としてくださる政党に変えられるかどうかを議論しなければならない。それがダメならば、自由民主党というのは多分なくなってしまうんだと思うんです。

そういう意味で、本当に健全な2大政党の一翼を担える政党に変えることができるのかどうか。それがこの総裁選で試されている。それだけの危機感を議員全員に持ってもらいたいと思っています。

**影山委員** どうもありがとうございます。

では、第1部はこれで終了させていただきます。

## 第 二 部

### 《 質 疑 応 答 》

**司会** 大変活発な論議をありがとうございました。第2部のほうも期待しております。

それでは、引き続いて第2部に入らせていただきます。まず、代表質問者をご紹介します。いずれも当クラブの企画委員でございます。候補者の方々からごらんになって、左から原田亮介さん（日経）、倉重篤郎さん（毎日）、そして宮田謙一さん（朝日）です。

第2部では、質問に対するお答えは、原則1分以内でお願いいたします。ランプが点滅いたしましたら、そこで発言を締めくくるようにお願いいたします。

ただ、質問によっては、先ほどのようにイエス、ノーでお答えいただくような場合もあると思います。限られた時間です。有効に使うためです。ぜひご理解いただきたいと思います。それでは、代表質問をよろしくお願いいたします。

**宮田委員** それでは、お尋ねいたします。いまほどの議論をお聞きしていて、こういう議論が選挙前に行われていれば、あれほどの敗北もしなかったのかなあという思いを抱きながら聞いておりました。

いまの議論でも出ましたけれども、大変な歴史的な敗北を自民党は喫しました。さあ、この党をどう再生させていくのか、再建していくのか、この党のよって立つ原点といいましょうか、起点は何か。今のお話でも、自民党の役割の再定義というお話も出ておりました。そういうところに話が行くのは当然のことだろうと思います。

そこで皆さんにお聞きします。皆さんにとって「保守」とは何か。保守の理念とは何なのか。なかなか抽象的で難しいかもしれませんが、お答えいただきたいと思います。まず谷垣さんからお願いします。

**谷垣候補** なかなかこれは簡単に答えるのが難しいですが、やはり先人がつくりあげてきたいろんな歴史であるとか伝統であるとか文化を基本的に尊重する。やはり長い歴史につくられてきたものに対して、いまの世代というのは謙虚であるべきだと思います。

しかしそれと同時に、その謙虚であり続けていくと、世の中が停滞してしまいますから、保守の精神の中には、一種の進取の気性というものがやっぱりなきやいけないんだろうと思います。

それとやはり、これが世界共通かどうかはわかりませんが、日本の場合、日本の保守は、やはり自分の生まれ育った地域であるとか、いま住んでいる地域、それから家族を大事にしよう、そういう中で人とのつながり、そういうものを大事にして、そして全部国に頼らずに、公共の精神というものを発揮していこうじゃないかと、こういうようなことになるんじゃないかなと、私は思います。

**宮田委員** お聞きしていると、何となく鳩山さんの友愛と似てるなあという気もするんですが、同じなんですか。

**谷垣候補** まあ、鳩山さんの友愛は、私、よくわかりませんが、いま申しあげた保守というのは、大体いまのような定義は、保守ということに通ずるんじゃないかと思います。

ただ同じかといわれますと、保守の場合には、先ほど申しあげましたように、すべて国に頼らずにまず人は独立自尊、自分でやはり考えるべきだ。しかしそれと同時に、助け合いといいますか、共助の精神を持っていくこと。民主党の政策を見ますと、その共助の精神といいますか、やはり国が子ども手当でも全部家庭にボーンと入れてやっていくというものですから、鳩山さんのいう「友愛」というものが「保守」なら、その「保守」と民主党の政策は矛盾していると思います。

**宮田委員** 河野さん、同じ質問です。

**河野候補** 強い経済と優しい社会だと思っています。かいた汗が報われる。そして機会が均等に与えられる。同じスタートラインに立てない人もいらっしやいます。そういう人にも、きちんと同じような機会が与えられる。そういうのが私は保守の理念だと思っています。

**宮田委員** 民主党も同じことってませんか。

**河野候補** 民主党がどういっているのかというのは、少しいろんないい方があるのですが、民主党のいまの政権をみていると、やはり再分配指向、つまり政府に資産を集めて、政府が子ども手当、あるいは高校の無料化、そういう形で、その資源を再分配しますよという政党に、私にはみえてなりません。自由民主党が目指すのは、自助努力をしたうえで、どうしても足りないところにきちんと手を差し伸べる。それは強い経済と優しい社会だと、私は思います。

**宮田委員** 西村さん、お願いします。

**西村候補** 私も伝統的な価値、文化を尊重しながら自立していく、自助努力でまずは頑張る、というのが基本的な精神だと思います。そして、そうした精神に基づいて、自由な経済活動の中で国際社会をリードしていく。こういうことだと思います。

ただ一つ違うのは、私はやっぱり地域の共同体というものは、そういう競争原理だけではなくて、むしろお互いの助け合い、相互扶助あるいは家族の信頼関係、人とのつながり、そうしたものに基づいた共同体があると思います。こうした地域の共同体を大事にしながら、かつ自由な競争の中で経済を発展させていき、そしてみんなが豊かになっていく、というところが私の考える新しい保守です。

**倉重委員** いま、会場からちょっとおもしろい質問が来たので、お聞きします。「自由民主党の党名を変える考えはありますか」という質問なんです。名は体をあらわすということで、自由民主党の新しい役割の再定義の中で、そういう議論がこれから出てくるかもしれないんですが、鳩山さんは、自由と民主の間に「友愛」という言葉の一つ挿入したわけですね。「友愛新党」といってもいいぐらいのネーミングだと思うんですけども、それについて、今後の話でありますか、お考えがあればお聞きしたいと思います。まず西村さんから、どうぞ。

**西村候補** 私は、いまの段階では考えておりません。「自由」と「民主」というのは非常にいい言葉ですので、民主党にはない自由というのが我々にはある。先ほどの自立、自助努力、自由、これは我々の大事な価値でありますから、私は「自由民主党」って非常にいい党名だと思っています。いまのところは考えておりません。

**倉重委員** 河野さん、いかがですか。

**河野候補** 私は、党名は別に変えても構わないと思っています。「自由」と「民主」というのは、かつて「自由党」というのと「民主党」があって、

合併して「自由民主党」になったんだと思うんですが、何かほかにいい党名があればいいのかもしれませんが、せっかく「自由民主党」という一番いい名前を持っているのに、それを手放す必要もないのかなとは思っています。

ただ、再定義をして、もっといい、名は体をあらわすいい名前があるならば、それに替えるのは、私はやぶさかではないと思っています。なかなかそれを考えつけないというのが正直なところです。

**倉重委員** 谷垣さん、「絆新党」というのはいかがですか。

**谷垣候補** 前回、野党になりましたときは、細川政権のとき、この議論を随分当時の党内でもやりました。そこで、いろんなアイデアも出たんですが、結局、「自由」と「民主」というこの2つを超える言葉は見つからなかったんですね。むしろいいところ取りをし過ぎていてる党名かもしれません。「絆」といっていただきましたけどね、「自由民主党」という名前を超える名前がなかなか見つからない。変えてみると、何かやっぱり影が薄くなっちゃうといえますかね、迫力がなくなっちゃうということがあるので、私はちょっといい名前つけ過ぎたかな、名前負けしないように頑張る、ということじゃないでしょうか。

**宮田委員** さっきの保守論議に戻りたいんですが、この自民党の厳しい状況から立ち直るために、保守に回帰すべきだ、と。「保守回帰」という言葉がございますね、まあ、どういう意味なのか、人によってイメージするところは違うのかもしれませんが、まあ、伝統主義といいたいでしょうか、ナショナリスト的なアジェンダでしょうか、そういったものにより依拠すべきであろうという意見だと思います。

もう一方に、これだけ勢力が小さくなった以上、もっと中道、あるいは中道左派のほうにまでウイングを広げるべきである、と。よりリベラル色を強める必要があるのではないかと、両様の意見があると思うんですが、どう思われましょ

うか。河野さん。

**河野候補** 前段の復古主義への回帰というのは、私はあり得ないと思っております。もう一つ、中道左派までというところは、まずその前にセンターが、この党の軸はここにあるんだということをはっきりさせたうえで中道をとりにいくということを考えるのは、それはありだと思いますが、この軸がはっきりしないままふらふら、ふらふらするというのは、よくないと思っています。

左側には民主党という政権与党があるわけですから、そこと全く同じようなところへ野党が行っても、これはただはね返されてしまうだけです。まず、自由民主党の軸はここにあって、しかし、中道の支持をもらうために、政策的にいろんなことを考えるんだというのは、それは将来の政権をねらう段階であり得るのかもしれませんが、いまやらなければいけないのは軸の議論のほうだと思っています。

**宮田委員** 西村さん、いかがですか。

**西村候補** リベラル、中道レフト、中道リベラル、何を指すか、あるいは復古主義的なものは何を指すか、必ずしも明確ではありませんけれども、私の立場は、地域の共同体がやっぱり傷んでいる、壊れている。我々は、そういう地域社会に根差した政党で、その人たちの思いをくんで、いろんなことを政策に実現してきた党だと思いますので、そういう意味では、その共同体を守るために、行き過ぎた規制緩和とか、競争原理、拝金主義的な発想というものを、私は地方では排除しなきゃいけないと思います。伝統的な価値、文化、家族の絆、もっと健全な家族観とか職業観、こうしたものをしっかり教育の中に取り入れるべきだというふうに思っています。

さらにいえば、例えば、外国人の参政権付与には私は反対ですし、それから、夫婦別姓のような考え方にも反対です。

**宮田委員** 谷垣さん、いかがでしょうか。

**谷垣候補** まあ、復古主義的というのではないと思います。それで、先ほど申しあげたような保守の考え方からしますとね、やっぱり個人の自助努力が基本なんですけど、共同体や何かの共助的機能というの尊重する。そして、まあ、最後は国家が出ていかなきゃならないときもありますが、過剰な国家介入は排する。そうして、できるだけ寛容な、幅広い保守主義というものを考えていく必要が、私はあると思います。そうしますと、何というか、かなり手は伸ばせるんですよ。

**宮田委員** 河野さんが「復古主義」といつてしまったので、ナショナリスト的なアジェンダについての率直なお話は聞けなかったような気がするんですけども、ちょっと質問を変えてみたいと思うんです。自民党というのは、ここ50年ぐらいでしょうか、あるいは20～30年でしょうか、あの戦争をどう評価するかをめぐって常に揺れてきた。その最たるものは、靖国神社に対する首相あるいは閣僚の参拝という問題だったんだろうと思うんですね。

こうした党内の亀裂というんでしょうか、対立を、これからの自民党も引きずっていくのか、あるいは歴史的にはいろんな意見があってもいいと思うんですけども、政治的には何らかの形で決着をつけて前へ進んでいくのか。例えば、国立の追悼施設をつくるという話を民主党や公明党はいつておりますけれども、何らかの形で政治的な決着をつけていくというお考えはあるんでしょうか。河野さん。

**河野候補** 靖国神社にA級戦犯が合祀されている以上、例えば天皇陛下はお参りにならないだろうと思います。中国との関係上、総理がお参りするということもなかなか難しいんだと思うんです。私は、国立の追悼施設をつくって、そこへ天皇陛下も行かれる、総理も参拝をする、あるいは外国から来られた国賓あるいはその他来賓の方にもお参りをさせていただくというのが、一番自然なのではないかというふうに思っております。

**宮田委員** 谷垣さん、どうぞ。

**谷垣候補** やはり靖国神社というところは、亡くなった方が靖国で会おうというような気持ちで亡くなられたということがありますので、ほかの施設をつくるというのは、私はあんまり賛成できないんですね。ただ、A級戦犯というものが合祀してありますと、なかなか難しいのは、いま河野さんのおっしゃるとおり。ただ宗教団体ですから、ここは、政治や国家が介入するというのはなかなか難しい、解きたいところがあるのは事実です。少し私は政治の枠外でこの問題を解くような試みをやっていただくべきではないかと思います。

**宮田委員** あの戦争の評価というのがありますね。谷垣さんは以前の総裁選のときにお聞きしたことがあるんですけども、河野談話をどう評価するかとか、あるいは村山談話をどう評価するか。最近の自民党の中は、ここがかなり意見が分かれるんですね。そろそろ決着をつけたらどうだと思うんですけども、いかがでしょうか。

**谷垣候補** まあ、決着といっても、いろんな考え方、これはありますよね。政治的に決着をつけるような問題じゃないんじゃないでしょうか。

**宮田委員** 西村さん、同じ質問です。

**西村候補** 私も、国を思って亡くなられた方々を祭る靖国神社、私も議員の会に入っておりますので、参拝をしています。これは一議員として、一個人として、しております。

私は党内でそんなに大きな議論になっているとは思わないんですけども、まず前提として、何か別の施設をつくることには反対です。本来は議論すべき問題じゃないと思うんですけども、今後、もし政治的な何らかの大きな問題が生じたとすれば、私は議論をすることは——何をどう議論するかというところもあるんですが——あり得ると思いますけれども、いまの段階で大きな、党内で亀裂になるような問題になっているとは思っておりません。

**宮田委員** 次に、外交のことをお尋ねしたいんで

すが、河野さん、民主党の外交政策について、民主党が緊密な、対等な日米関係という政策を掲げているんですけれども、これに対して、不安が語られ、あるいは自民党は批判を加えてきました。しかし、翻って、自民党の対米政策はどうだったのか。これは、民主党は対米追随ではなかったかという評価をしているわけですね、あるいは批判をしている。

河野さんは、この批判についてどうお考えになりますか。そして、新しい自民党の対米路線というのはどうあるべきだとお考えですか。

**河野候補** 例えば、核密約の問題にしても、私は自由民主党がきちんと問題提起をして、密約を認めて、北朝鮮の核抑止をどうするんだという議論をやはりすべきだったと思っております。日米同盟というのは、私は大事だと思っていますけれども、例えば地位協定の改定ということをきちんと申し入れるべきだったと思います。

例えば、アメリカから入ってくるジャガイモの検疫がされないとか、犬の検疫がなされない可能性がある。そういうことについて日本の法律をやっぱり遵守しなければいけませんよ、あるいは環境に関する条項を入れなければいけませんよという、そういう議論ならば、おそらくアメリカもきちんとテーブルにつけたんだと思うんです。地位協定の見直しというと、すぐ身柄引き渡しの話に走るものですから、それは別な話ですよ、と。それはどうでもいい話で、まずこれをやりたい、そういう形で日米関係で議論すべきことはたくさんあったと思います。が、そこは官僚のリーダーシップのもと、できなかった。政治がそこは前に出なければならなかったと思っています。

**宮田委員** 谷垣さん、どうですか。

**谷垣候補** いろいろ問題点はあったと思いますが、従属してた、従属してたというのは、私は間違いだと思います。戦後の、それは戦争に負けたということも出発点としてはありましたけれども、その中で経済発展もして、地位を高めてきた歴史があるわけですから、私はそれはあんまり卑

下して考える必要はないと思っております。

**宮田委員** 自民党としての今後の対米政策というのは、そうしますと、いままでと変わらないということですか。

**谷垣候補** まあ、基本はいままでのとおりでよろしいんじゃないかと思います。

**倉重委員** 谷垣さんですね、日米同盟の関連なんですけどね、まあ、イラク戦争というのがあって、結局、小泉内閣のときに、日本がいろんな協力をしたわけですけどね。あのときに、谷垣さんは閣内に多分いらっしゃったと思うのでお聞きするんですが、あの戦争がどういう戦争であったかという総括は、アメリカでは行われているけれども、日本ではちゃんと国会できちんと与党が結論を出していない。まあ、民主党政権になってそういう話が出てくるとは思いますけども、谷垣さん本人としては、あの戦争の評価、それから日本の協力の総括ですね。それについてちょっとお聞きします。

**谷垣候補** 基本的に、あのときサダム・フセインを打倒するんだとアメリカが行動をいたしました。基本的に、じゃ、打倒した後どういう国を立てていくかという青写真がいかにも脆弱であった。弱かったと思います。当時から私は、アメリカの方々に「一体、じゃあ、サダム・フセイン政権を倒した後、どうするのか」とうかがうと、「いやいやそれは、日本占領の経験があるから、我々是可以るんだ」というご返事でした。私は「そうかなあ」と思っておりましたけれども、そういうやっぱり基本的な失敗はあったと思います。

ただ、あの当時の9・11以降の国際情勢の中で、アメリカの危機意識、それに対してやはり同盟国としてある程度のお手伝いをするということは、やむを得ないことだったと思います。

**倉重委員** ちょっと突っ込みますけれども、そこはね、日本を占領したときの成功体験をもとに、アメリカがあ戦争に踏み切り、やろうとした部

分があると思うんですね。ブッシュさんの話もね。そのときに、日本側から、イラクと、あの当時の日本は全く違うんだという分析と情報を提供することはできなかったのかと、いまになって思うこともあるんですが、その辺はいかがでしょうか。

**谷垣候補** 当時の担当者がどうしたのか、私もつまびらかにはできませんが、私自身は、アメリカの友人には、それは違うんじゃないか。やっぱり戦前の日本のある程度の政治的な、歴史的な経験と社会のあり方と、いまのイラクとはかなり違っててんじゃないか、と。それから、日本のような民族社会と部族社会の違いと、そういうようなことは、私自身は指摘したつもりでございます。

**原田委員** 来年の参議院選挙をにらんだときに、経済政策で民主党とどう対立軸をつくっていくのかというのは重要な問題だと思います。民主党のマニフェストで、弱点が2つあるといわれていて、成長戦略がない、財源がいいかげんだ、ということがございます。

もう一点、逆に民主党が今回の選挙で大勝した一つの理由は、お金の無駄遣いというものの、これを数々挙げて、国民の怒りに火をつけたということがあると思います。

最初に、成長戦略をうかがいたいんですけど、先ほど小泉構造改革についての評価を3人にいただきました。それで、河野さんのお話はかなり具体的でしたので、大体承ったとおりでいいと思うので、谷垣さんと西村さんに聞きます。小泉改革の規制緩和、それから社会保障政策、郵政問題、この3点について、よかった点があるのか。悪かったら、どこが悪かったのか。具体的にうかがいたいんですけど。

**谷垣候補** あの当時の小泉政権の政策というのは、何を目的にしていたのかというのは、いろんな理解があったと思います。つまり、小さい政府そのものが、日本社会をよくするんだ、という理解の方もいらっしまったと思います。私は財務大臣でしたので、あの政策には大いに責任があるわけですが、私の考え方は、社会保障にせよ、ある

いは地方の財政の問題にせよ、どこかで税負担というものを求めて、これだけの少子高齢化に対応しなければしょうがない時期が必ず来るだろうけども、それをストレートにまず増税ありきということでは、なかなか理解していただけないので、やはり無駄を省くということをまず徹底的にやるべきだ、と。私はそう考えて、小泉構造改革に従事していたわけでございます。

したがって、そろそろ潮どきもあると考えまして、前回総裁選に出ましたときは、消費税がなければ、そういう問題は解決できないという問題提起をさせていただいたわけです。が、残念ながらあのときは負けてしまった。

**原田委員** 西村さん、いかがですか。

**西村候補** 規制緩和については、金融、ITの分野、あるいは国内の投資の緩和、こうした分野で経済成長の源泉になっていると思います。ただ、地方での大型店の規制緩和であるとか、あるいは労働規制の緩和とか、こうしたものが一部経済の疲弊、地方経済の疲弊、あるいは弱者、格差を生んでいる面があると思います。

郵政民営化は、私は進めるべきだと思っていますすけれども、ただ、地方のサービスが低下している。あるいは200兆円もの郵貯のお金がまだ有効に使われていないという点は、これからの課題だと思います。それからもう一つ、4,200億円もの税金を初めて国家に納めたということも、これも大きな、新たな財源として郵政民営化の一つの成功例だと思います。

社会保障費については、削り過ぎて、地方の医師不足、救急の体制なんかの疲弊を呼んでいるというふうに思います。

**原田委員** 3人にうかがいたいんですが、少子化が進んで、まあ、財政も余裕はほとんどないという状況の中で、日本の成長をあげていくためには、何をなすべきだというふうにお考えでしょうか。

**谷垣候補** やっぱり成長する種を見つけていかなければいけませんけれども、それは環境である

とか、あるいはバイオテクノロジーであるかもしれませんが、いろんなものを考えてそこに投資をし、技術を磨いていかなければならないと思います。やっぱりある程度安心して子どもを産み、育てられるという環境をつくっていかないと、元気が出てこないんだと思うんですね。それで、一つ子ども手当というのは、ある意味では徹底した対策ですが、もっとやはり働き方を含めて考えていかないと、私は少子高齢化の対策にはならないだろうと思います。働いている女性も子どもを産んで、社会復帰がすぐできる。子育てをしやすい。そういう環境をつくっていくという中で、少子高齢化に対してもある程度形ができつつあるなあ、と。これが元気が出てくる根底になきゃならないと思います。

**原田委員** はい。じゃ、河野さん、お願いします。

**河野候補** 今後50年、100年を考えると、まず出生率をどこまで上げるかという明確な目標を立てて、それに必要な財源というのはきちんとつけていく必要があると思います。これは即座にプラスになるかというと、なかなかならないかもしれませんが、子育て支援の部分などは、むしろ雇用対策の一部に組み込むことができるだろうと思います。これは本当に長期的にやらなければいけないことだと思います。

もう一つは、外国からの投資をきちっと受け入れられるような環境をつくっていかねばならない。官製規制がいくつもつくられましたが、そうしたものはまずきちんと撤廃をする必要があると思っています。

金融その他に関して、私は東京がいいか、どこがいいかというのは議論があると思いますけれども、人と情報がこの国に集まってくるような、つまり、それはメディア、コンテンツ、金融、何でもいいと思いますが、特定の分野の専門家と情報がきちんと日本に集まるようなセンターを育成することに力を入れていく必要があると思います。その3つをやっていききたいと思います。

**原田委員** はい。西村さん。

**西村候補** 先端分野、環境、医療、宇宙、海洋、あるいは新エネルギー、こうした分野の投資を進めるべきだと思います。

それから、人口は減っていますので、1人当たりの生産性を上げるのにどうしたらいいかという議論をしなきゃいけない。これは各企業でのIT化をもっと進める、あるいは職業訓練、技能を高めていく、こうした投資は必要だと思います。

それから、私は、少子化対策は、欧米に比べて家庭に行く支援の額は非常に少ないわけですので、これは思い切った手当てでも必要ですし、保育所の整備、それから、働きやすい環境の整備、それから、いわゆる小学校での学童保育も含めた、幅広い投資が必要だと思います。そのうえでさらに、私は技術を持った外国人は国内に受け入れること、これを広げていく、それから、海外からの投資を広げていく、こうした努力も続けていくべきだと思います。

**原田委員** もう一点だけ経済分野でうかがいたいんですが、自民党のマニフェストでは、景気が回復した後に消費税を引き上げるという公約を掲げて、まあ、選挙では敗れたわけですけど、消費税を引き上げるべきかどうか、引き上げるとすればいつなのか。

もう一つ。消費税の引き上げの前に歳出カットを進めるべきだという議論が前々からございます。それで、果たして、先ほど申しあげたような無駄遣いというものがどのくらいあるのかについて、自民党は民主党に対して、あんなに多くはないということで批判していたんですけど、自民党の総裁になられて、与党に仮になったとすれば、いま民主党が掲げているような無駄遣いという、そのぐらいの規模の財政の削減というのはできるとお考えなのか。あれはやっぱり大げさだというのか。税と歳出カットの無駄遣い減らしの、この2点を、まず、無駄遣いをいわれていた河野さんから。

**河野候補** 僕はフローで5兆あると思っています。例えば、今度の補正予算でも、電子黒板やパソコンを入れるのに2,000億というのもあり

ました。それから、世界最高速のスーパーコンピュータをつくるのに1, 154億円プロジェクトに投下しましたが、やっていたメーカーが撤退をして、どうしたらいいの? という状況になっております。

科学技術立国をしなきゃいかんという名目のもと、予算の中身が精査されずにかなりついているというのを目の当たりにいたしました。私は残念ながら、厚労、国交、経産、農水にはさわらせてもらえませんでした。この4つは河野にさわせるなということで、それ以外の無駄撲滅をやりましたが、そこで1割近い無駄があるというふうに、私たちのチームで出しましたので、少なくとも一般歳出の中で5兆円の組みかえはできるんじゃないかと、私は思っています。

**原田委員** はい。じゃ、財務大臣をやられた谷垣さん、いかがですか。

**谷垣候補** やっぱり消費税をどこかでやらなきゃいけない。現にこの前、基礎年金の税の2分の1に持っていくという法律の中に、附則に、平成23年度にその資金手当て——いまはいわゆる埋蔵金で埋めておりますから、恒久的な財源ではない——をやらなきゃならんと書いてあります。これは、新しい政権がどうされるかわかりませんが、少なくとも法律でそう規定されているわけですから、私は、消費税に限らず、全体の税制改革をしながら、その財源を確保しなきゃいけないと思います。

まあ、どのくらい無駄があるか。私は河野さんのように5兆とすぐいい切る自信はありません。無駄はないわけではもちろんないと思いますから、もっと精査を進めていかなければ、これはいつてみれば永久革命みたいな話だとは思いますが。ただ、ちょっと5兆というところまではとて行かないだろうなと思います。

**原田委員** はい。西村さん。

**西村候補** 無駄はですね、私も全部予算を精査したわけじゃなくて、一部だけ、政務官になる前に

チームに参加をしましたけれども、ざっくりとした感じでいうと、1兆、2兆かなあというイメージは持っています。ただ、民主党はこれからやると思っていますので、民主党のお手並み拝見というか、彼らが本当に無駄を見つけてくれば、無駄だと思えば我々は賛成をするし、いや、これは必要な予算だと思えば反対をするということです。これはぜひ民主党に頑張ってもらいたいなあという思いであります

財源としては、この無駄排除と、それからもう一つは埋蔵金。これは特別会計のお金ですけども、これもまだ、ちょっと最近の数字は知りませんが、ざっくりと20兆円ぐらいはあると思いますので、これをどう使うかということがあります。

それからもう一つは、本当は道路特定財源の暫定税率分2.5兆円ぐらいは、これはいろんなものに使えるなあと思っていたんですけども、残念ながら民主党はこれを廃止すると思っていますので、これは使えなくなります。

**倉重委員** 党をどう再生するかという最初のスタンスに戻ってお聞きしますが、西村さんからお聞きしたいんですがね、派閥解消と世代交代が2つの軸になるということですね。世代交代のほうは、先ほど河野さんとのやりとりの中で、本気度はどの程度あるのかというのは、若干クエスチョンマークを感じたんですが、その辺についてもう一回話してください。世代交代の意思を明らかにしてほしいのと、それから、派閥解消について、派閥を出られたことを非常に強調されておりますけれども、実態として、いま、派閥は本当にあるのかどうか、昔のいう意味でのですね。そういう意味では、事実上派閥のない中で、派閥解消は売り物にならないと思うんです。むしろ、森さんからいわれて出たとか、先ほど河野さんからいわれたような、そういう河野つぶしじゃないかとかいうことをいわれるほうが、むしろ西村さんにとって非常に心外でマイナスなことだと思うんですが、その森さんの「クモの巣」的な存在と、どのようにあなたは今後対決して、党改革を進めていかれるのか。お聞きしたいと思います。

**西村候補** まず世代交代については、これは本気

でやらないと、党は立ち行かなくなると思います。いままでのような年功序列、派閥均衡のことをやっていけば、若く意欲のある人たちはとてもできませんから、これはぜひというか、絶対進めたいと思います。

まあ、派閥の機能はもうなくなってきましたから、野党ですし、配るものもないんでしょうし、ですから、解消といっても意味がないかもしれませんが、私が総裁になれば、そうした推薦とか、均衡とか、バランスとか、そういうのは考えずに、いい人にやってもらおうと、そういう意味です。そこは本気です。

それから、クモの巣とどうつき合うかというのは、よくわかりませんが、まあ、先輩の政治家の方々がたくさんおられますから、いろんなこれまでの経験を聞いたり、そういうおつき合いはもちろんそうやっていただいていた。森さんに限らず、いろんな方がおられますから、それはそうですけど、ただ、私が総裁になれば、私の意思で、これはしっかりと人事をやって、世代交代を進めて、民主党との違いを出しながら国会論戦をやっていく。これは必ずやりたいと思います。

**倉重委員** 谷垣さんにお聞きします。党総裁になって、やっぱり最初が一番大きな関門は、人事その他ありますけれども、現実問題として財政問題だと思うんですね。自民党の交付金が150から100に落ちる。しかし自民党の職員を抱えていかざるを得ない。しかも、多分ですね、これまで潤沢にあった企業献金が相当これから目減りしていくことは、火を見るより明らかだと思いますね。そんな中で、党の財政運営をどうやっていけるのか。そのお考えをお聞かせください。

**谷垣候補** これこそが実は一番前に立ちはだかった重いテーマである。なかなか総裁選の議論として今まで議論してきませんでしたし、しにくい問題ですがね。やっぱり私はこれは党も相当リストラをしないと立ち行かないだろうと思います。人的にもそういうことがあるだろうと思いますし、組織もかなりスリムなものにしていかなければいけないだろうと思います。

それと同時に、私どもの党は、いま、企業献金とおっしゃいましたけれども、現在はかなりやはり政党助成金の比率が大きい組織になってきておりますから、この政党助成金が大きくカットされるというのは非常にこたえるわけです。しかし、それと同時に、そうなりますと、いろいろな支援者の方々から、やはり献金を募るということも、これは努力をしなければ、現実にはやっていけなくなるだろうと思います。そういうことの組み合わせで何とか対処しなければいけないと思います。これはやっぱり倒産した、あるいは倒産しかかった会社といっちゃいけないかもしれませんが、やはり民事再生にかかっているんだ、というぐらいのつもりでやらないと、乗り越えられないと思っております。

**倉重委員** 河野さんにお聞きします。先ほどね、あしき体質をそのまま自民党内に残して、その人たちがまだベンチに入っている、と。河野さんなら多分お話しになると思うんですが、どういう人たちをスタンドに追放される予定ですか。その計画を教えてください。

**河野候補** 森さん、青木さんをはじめ、今回派閥の親分でありながら、小選挙区で当選されずに、比例代表で上がってきたような方がいらっしゃいます。明らかに自民党は日本の国を上回る少子高齢化の現状になっているわけですから、そういう方にはどこかで比例の議席を次の順番の若い世代に、次の選挙の前に譲っていただきたい、というふうに思っております。

また、今回の総裁選挙というのは、こういう危機的な、だれかが「がけから落ちた」といっていましたが、がけから落ちているにもかかわらず、まだ同じようなことをやろうとしている、そういう方々に、この党の中で、しかも派閥がなくなったといわれますけれども、依然として委員会の人事なんかはまだ派閥がやっているわけですから、それを牛耳っているような立場の人がそういうことをやられるというのは、私はもう甚だ不見識だと思っております。そういう方には、議席を譲っていただくか、バッジを外していただきたいというふうに思っております。

**倉重委員** はい、ありがとうございます。

これから野党になったからには、国会の場で自己実現をせざるを得ないという厳しい局面になってくると思うんですね。その場合、やっぱり国会論戦を非常に我々も注目していますし、政策で勝負されるということで、歓迎しているんですけども、まず谷垣さんですね、かつて細川政権ができたときは、スキャンダル攻撃で、一回ひっくり返した。そういうこと、柳の下に2匹のドジョウがいるのか、いないのかと、それから、あとはやっぱりみんなが一番関心を持つのは、党首討論ですね、鳩山首相とどのように渡り合うおつもりなのか。お聞かせください。

**谷垣候補** まず、国会の論戦ですけどもね、やっぱり若くて優秀な方にどんどんぶつかっていただきたいことがあります。それと同時に、ベテランで、いままで蓄積のある、やっぱり税だったらこの方とか、国際金融だったらこの方というのが、我が党にはいらっしゃるわけですので、やはりそういう重鎮クラスの方々にも、国会論戦のやはり先頭に立っていただく。野党になったら、それこそが政治家の生きがいだと思って、国会論戦に頑張っていただくということがまず第一じゃないかなあと、こういうふうに思います。

それから、もう一つ何でしたっけ。

**倉重委員** スキャンダル攻撃。

**谷垣候補** ああ、スキャンダル攻撃。やっぱり私も、まず政策でもって対峙していくということを第一義とすべきだと思います。ただ、そうはいいいまでも、金銭面の大きな疑惑があるようなときに、全くそれをさわらずに逃げるというのも、野党としては根性がない話だと私は思います。

**倉重委員** 河野さん。まあ、これから28日に投票が行われるわけですね。そのときの、ふたあけた、そうしたらどういう結果が出るかまた注目されるんですが、先ほど河野さんが、2、3位連合の話をされた。若手で組もう、と。しかし西村さんから色よい返事をもらえなかったというこ

とは、こういうところでそういうことをオープンにするということは、普通はこういうのを裏で話をつけて、結果的にそうなることがこれまで永田町の常識だったんですけどね、ある意味ではもうギブアップされているというような印象を受けたんですが、その辺の戦略はいかがなんでしょうか。

**河野候補** 私はどちらかというと、国民の皆様の世論の支持をいただいて、党员票に重きを置く戦略を立てております。しかし、決選投票では、議員しか投票することができませんので、仮に1番になったとしても、決選投票に持ち込まれてしまった場合には、何らかのことをやらなければいけない。そのときの大義名分は、世代交代と2人ともいっているのであるならば、どっちが上に来ても、世代交代はしっかりなし遂げようよ、ということだと思う。テレビカメラの前で「そうだ」というのが、自由民主党の再生につながるわけで、これを裏でこそこそやって、2位3位連合だ、昔のニッカやサントリーみたいな話になってもいいけませんし、そこはどちらが上になっても、世代交代を自民党はやるんですということをはっきりして総裁選を戦っていくのが、私は筋だと思っております。

**倉重委員** わかりました。話はどんどん展開しますが、来年の参院選ですね。これはぜひ谷垣さんに聞きたいんですけども、これは非常に大きな勝負どころでありまして、すでに小沢民主党はそれに向けて全力を投入している感じであります。

きょうのニュースでも、歯科医師連合会が自民党からの候補を取りやめるとするような報道もある。要するに、かつて自民党が誇った組織が、もう非常に崩れていて、これからの1年弱の期間でこれをひっくり返すのは、ものすごい大変な仕事になると思うんです。まずとりあえず、歯科医師会連合会にはどういうふうに対応されますか。

**谷垣候補** 歯科医師会とまだ私はお話ししたわけではありませぬので、よくまた聞いてみたいと思います。今度、どういう候補者をお立てになれるのか、あるいはもう立てないとお決めになった

んなら、どうされるのか。これはちょっとまだ私、いま、具体的なアイデアは持っておりません。

ただ、もしこの総裁選に勝たせていただいたら、直ちにに取り組むべきことは、いろいろないままでの友好団体との間で、まずそういうお話をさせていただくということは、一番必要なことだと思います。

**倉重委員** 河野さんにお聞きします。これはちょっとと少しい過ぎかもしれませんが、河野さんのお父様である洋平さんも、おじい様である一郎さんも、まあ、総理候補といわれながら総理になれなかった方々ですね。それに比べて、吉田家の麻生さんにしても、それから、岸家の安倍さんにしてもね、総理になった。ある意味では総理大臣になれない家系というものがね、(笑) 実はあるのではないかと。でも、それはそれとして、いろんな役割があつてですね、十分政治家としては私は立派だと思うんですけども、その辺の壁というものを何か意識されていることはあるのかどうか。

お話をお聞きしていると、ほとんど民主党のほうに近いのかなあという印象があるんですね。ですから、この総裁選の結果、もしかしたらね、河野さんが同志と新たな行動を起こすことがあるのか、ということをやっと感じざるを得ないような、旧来の自民党との違いがありますんでね、その辺のご意思も、もしあるのならば、お話しいただきたいと思うんですけども。

**河野候補** 渡辺喜美さんからは、選挙前、連日のように、「党首は君だ」といってお電話をちょうだいいたしました。そのとき「いやいや、ちょっと待ってくれ。おれは自民党の総裁になるから、そしたら一緒にもう一回やりましょう」ということを申しあげました。

自由民主党が再生できなければ、健全な2大政党の1つの軸にはなりませんから、「みんなの党」と一緒にやるかどうかは別として、そのときには何らかのことを考えるということは、将来あり得るのかなあというふうに思っております。

家系についてはですね。何か吉田系が倒れて鳩

山系になったというのは、何十年たって、また同じことをやるとるなあということはあるのかもかもしれませんが、あんまり私には関係ない話だと思っております。むしろ、日本の政治家というのは、実は日本の国の中で一番国際競争力のない存在です。日本の総理大臣や大臣を経験した人が、国際機関のトップになるということはあるまいですね。むしろ、総理になって、その次は国連事務総長を目指すぐらいのつもりで頑張りたいと思っております。あんまりなれる家系、なれない家系、気にしても仕方がないというのが、本当のところだと思います。

**宮田委員** 先ほど谷垣さんが、党の財政の苦しさということをお話しになったんですけれども、いよいよ党の財政が苦しいと、企業・団体献金の廃止というのは、冗談じゃないということなんでしょうか。

**谷垣候補** まあ、私は、現実問題として、企業献金というものをお願いしなければ、なかなか立ち行かないと思っております。

**宮田委員** 民主党はこれを廃止する方針ですが、この法律が出てきた場合は反対するということですね。

**谷垣候補** まあ、そこまではまだ十分考えを煮詰めておりません。

**倉重委員** これは最後のこちらからの質問だと思うんですけど、谷垣さん、自公連立が今回崩れたんですが、公明党との関係、10年間の連立関係が、一体自民党にとってどういうものであったのかですね。その総括と今後。公明党とどういうお付き合いをされていくのか。

**谷垣候補** あの一、今後、野党同士ですから、与党であれば連立というものはあり得るわけですが、野党で連立というのは、これはないと思いますね。

それから、また公明党も立て直しのために、ま

ず党のアイデンティティーをどう確立して、もう一回あれされるかというのに取り組まれるんだろうと思います。しかし、やはり10年間いろんな政策なんかを本当に密に議論してきましたから、やはり人的な信頼関係というのも随分あります。ですから、今後の野党としての国会活動の中で、当然そういう人的な信頼関係のもとに、いろいろ議論をしたり、協力したりするということはあるだろうと思っております。

それから、総括というのはなかなか難しいですが、公明党との連立ができたきっかけは、やはり前の金融危機のときに、何とか乗り越えなければならぬということで連立を組んだわけです。あんな危機を乗り越えるためには、連立が効果を発揮したかなと、これは歴史的な成果ではないかと思えます。

**司会** 大変活発な、おもしろい議論をありがとうございました。時間をオーバーいたしましたけれども、これで本日の討論会を終わりにしたいと思います。会場の皆様もどうもご協力をありがとうございました。斎藤理事長のほうから、各候補者の方に記念品をお贈りいたし、日本記者クラブとしての感謝の気持ちをあらわしたいと思います。

**(文責・編集部)**